



生家は北河内の京阪沿線駅徒歩3、4分の立地ながら兼業農家だった。60年も前は周辺はまだ田舎であり、生い立ちは農家育ちである。田んぼは何枚もあって、子どもの頃は稲刈りの日は一家総出でお弁当持ち、遠くの田んぼまで田舟を漕いでいった。「ごんぼ」「たけのはな」「へんでんしょ」「もとのしろ」など田んぼごとに名前もあった。明治人らしく頑固で農業一筋の祖父はこの地で米の二期作なども試みて黄綬勲章を受けた。(時の総理大臣は鳩山一郎)。祖父が亡くなってからの農作業は教員の父も従事していたが、日々の仕事はもっぱら母が担い、冬場を除いては母はいつも家には居なくて、野良仕事のない雨の日はとても楽しみだったことを覚えている。なんで、こんな昔のことを書き連ねるかというと、最近、読んだ本になんかしら郷愁みたいなものを感じて、自分の子ども時代の昭和の風景がよみがえってきたからである。

読んだ本は日本ではなく1950年代から60年にかけてのアメリカのノースカロライナの湿地帯に住む貧しい少女の小説である。読み進むと、自分の子ども時代とは全く違い(当たり前か)、映画「スタンドバイミー」を彷彿とさせられ、すべてがトイカメラ風(色が褪めてわずかにオレンジとブルーが残るような)の色彩を帯びた情景が浮かび上がってくる。もっと年を取ったら、昔のアルバムの中の自分の白黒写真の背景を見るだけで涙ぐんでしまいそうだ。

湿地の川のそばの崩れかけた家に住む極貧家族、兄や姉は早々と家出してしまい、父の暴力に耐えかねた母も自分をととても可愛がってくれた下の兄も家を出てしまう。飲んだくれで粗暴な父は何日も帰らない日があり、6歳の少女カーラは見様見真似で家事をこなし、野鳥の羽根を集めたり、自然と対話することが唯一の生活の彩りであった。学校にも通っ

ていないため読み書きもできず、そのうち父も戻らなくなり、独りで暮らすことになる。残された古いボートで川と入り江を移動して、村はずれの雑貨店でわずかな買い物をする。親切な黒人の店主が見かねて教会寄付の衣類などをくれ、カーラが海岸で掘り起こした貝を買い取ってもらって生活物資を補充、家の周りで畑を作って自給自足の生活。友だちは湿地に住む生き物だけ。あるとき、兄の友だちだったテイトから読み書きを教わり、少しずつ字が読めるようになった。やがてテイトが貸してくれた生物学の本まで読むに至り、それからはいっそう湿地の生き物と親しみ、観察する喜びを覚え、画も描き貯める。

いつしかカーラとテイトは仲良しから恋人になったが、テイトは大学入学のために村を離れて、会えなくなり、再び独りぼっちになってしまう。孤独にさいなまれたカーラは村の若者チェイスと情を通じ合うようになる。しかし、チェイスにとってはカーラは単なる蔑まれた湿地の娘、遊び相手でしかなかった。後半はいっきにサスペンス風になり、事故か？事件か！の様相になっていく。

今なお絶えないアメリカの人種差別。あからさまな差別はないように見えるが、単一民族の日本はさらに根深い気がする。よそ者や不審者への排除感はいたるところにあって、いったん何らかのレッテルを貼られたら住みにくい。おまけに今はコロナ差別まで加わって、田舎でコロナになればたちどころに村八分みたいな。そういう意味では、近隣関係が冷たくても疎遠でも「隣の人は何する人？」な都会は住みやすい一面もある。

一見、豊かになったような今も貧困はじわじわ潜み、お金のあるところとないところの差がどんどん大きくなっている。子どもの虐待も女性へのDVも増えることはあっても減らない。コロナが収まったら平安が戻るだろうか、時代は昔の設定なのに、現在に通じるいろんなことを考えさせられる一冊だった。

『ザリガニの鳴くところ』

ディーリア・オーエンズ 早川書房